

人間ドック健診施設機能評価 Ver.4 総合評価

施設名:公益財団法人日本生命済生会日本生命病院 ニッセイ予防医学センター

受審施設の概要

公益財団法人日本生命済生会日本生命病院ニッセイ予防医学センターは、大阪府大阪市西区にあり、2003年に人間ドックを開始した。

予防医学センターは2018年5月に移転され、人間ドックエリアと定期健診エリアを分るし、稼働率向上を図っている。最寄駅から約5分と交通アクセスも良い。

年間の受診者数は1日ドック約8000人、2日ドック約50人、その他の健診が約15000人、更に巡回健診を19000人実施している。2005年に初回の認定を受け、今回が3回目の更新審査である。

第1領域 理念達成に向けた組織運営

予防医学センターとして理念と基本方針が定められ、パンフレット、ホームページにも掲載されている。

個人情報保護に向けた取り組みとしては、プライバシーマークは取得していないものの、個人情報保護規定や個人情報漏洩事案時の初動対応マニュアルも整備されている。個人情報保護方針が明文化されており、ホームページの掲載、施設内への掲示も行い、周知されている。

就業規則等各種規程は、病院で一括作成され、院内のグループウェアで管理されている。スタッフの研修参加や旅費に関する規程も整備されて、スタッフ毎にどの研修会・学会に参加しているかの管理も行われている。

中期経営計画・年度事業計画・予算書等は予防医学センターとして作成されて、収支や目標が明確にされている。また、運営会議で内容の精査が行われ、スタッフへの共有も適切である。

職員の体制は、人間ドック認定医4名、人間ドック健診専門医3名、人間ドック健診指導医2名と充実しており、評価できる。医療スタッフも保健師5名、看護師7名と専任スタッフも多く配置され、土曜日も交代制で勤務にあたり業務運営は適切である。

教育体制については、年間計画に基づいた研修会が開催され、学会や研修会参加時の記録はグループウェアへ入力、管理され、全スタッフへ共有されている。医師の学会参加記録や外部研修会参加時の記録も共有されているとより良い。

医療安全管理体制については、院内感染対策マニュアルが策定されており必要時の改定も適宜実施している。感染性廃棄物処理マニュアル等もルールが明確になっておりスタッフに共有できている。内視鏡器具の洗浄、消毒は専門の洗浄員によって実施されている。

情報の管理体制は、使用しているパソコンへの外部媒体接続は承認を得たもののみ使用可となっており、情報を外部へ持ち出せない運用は評価できる。今後、ISOやプライバシーマークの取得に向けた取り組みが期待される。

高齢者や障害者等、配慮が必要な受診者への対応については、健診フロアへの専用エレベーターが整備され、駐車場から直接健診フロアに向かうことができる。車いす、聴覚障害等の属性情報は健診システムで登録されてスタッフ間での共有がなされている。

る。特に聴覚障害者へは検査の説明を筆談で実施する仕組みがあり評価できる。

外国人受診者については、2019年4月より医療通訳経験豊富な常勤職員を採用して外国人対応の体制を構築した。また、2019年10月より国際化を推進する国際室を新設され、今後の取組に期待できる。

第2領域 受診者中心の良質な健診の実践

予約・受付の業務は、委託業者へ委託しているが、リーダーとスタッフの担当は明確化されている。売上、収支状況は予防医学センターの運営会議、病院内の会議で確認され職員への報告会でも共有されており適切である。

人間ドック学会が提示する基本検査項目は全て実施されており、任意検査項目について定期的に検討される体制も確立している。

病院は2018年5月に移転しており、ドック受診者専用の入口およびエレベーターがあり、外来患者と混在しない配慮がなされている。ドックは時間差予約でスムーズに受付され、検査時は数名のコーディネーターにより、混雑状況に応じた誘導がなされている。施設内は清潔に保たれており、更衣ロッカーや待合の座席は十分な数が確保されている。各検査は基本的に個室化されており、婦人科検診はレディースゾーンで行われるなど、プライバシーに十分に配慮されている。更に月2回のレディースデイや、年2回の日祝日健診も行われている。

受診に際しては、事前送付書類に「健診ガイドブック」の冊子が同封され、当日の検査の流れや注意事項・FAQが記載されている。また各受付・検査にも、問い合わせマニュアルやFAQが準備されているが、ホームページにもFAQが記載されるとより良い。

事前送付書類には胃内視鏡検査など必要な検査についての同意書も同封されており、検査への同意が適切に得られている。ドック当日は、看護師による医療面接がマニュアルに沿って必要な情報が聴取され、得られた情報は健診システムで全スタッフに共有されている。施設内には非常呼び出しボタンやAED・救急カート・車椅子が配置されており、全スタッフに年1回のBLS訓練や避難訓練が行われている。

検体解析は病院と共有の検体検査室で、業務マニュアルに基づき適切・迅速に行われており、内部精度管理・外部精度管理も適切に行われている。外部精度管理は複数のサーベイでいずれも良好な結果を得ており、日本消化器内視鏡学会の施設認定も受けている。画像の判定は専門医を交えた二重読影が適切に行われているが、今後は読影医師に精査指示率をフィードバックする回数を増やすことを望みたい。

医師による結果説明は診察と同時に行われ、95%ほどの高い実施率が得られていることは評価に値する。結果説明は受診者1名につき10分程で、血液検査および胸部X線・心電図・胃内視鏡検査、場合によって腹部エコー検査の説明が行われている。今後は胃部X線検査やマンモグラフィ検査の説明実施も期待したい。結果説明に関する満足度調査も行われており、その結果を検討する体制も構築されている。

保健師による保健指導は、受診者1名当たり10～15分行われているが、実施率はまだ低率である。保健師の配置も1日あたり0～2人とバラつきがあるため、今後は保健師の配置を固定する等、引き続き専門職による保健指導実施率の向上に向け検討いただきたい。保健指導では当日の結果がタブレットで参照可能で、リーフレットや様々な食事・運動ツール等を活用し、受診者目線の指導が行われている。指導記録はシステム上で入力され、経年的に活用されている。今後は医師も交えた保健指導に関する教育プログラムを計画的に実施し、人間ドック健診情報管理指導士の積極的な資格取得を期待したい。

第3領域 継続的な質改善の取り組み

受診者の要望を把握する体制としてアンケート調査が毎日行われ、結果を定期的に検討する体制も構築されている。しかし回収率は3割ほどに留まっており、前回受審後に設置された意見箱も数件の年間回収数となっているため、今後は回収率向上のための方策を求めたい。

フォローアップについては、2018年度は病院移転の時期と重なり、フォローアップが停滞していたが、2019年度現在ではD1・D2判定の受診者へのフォローアップマニュアルが作成されており、フォローアップの体制は再構築されている。C判定（3か月後・6か月後再検査）受診者へのフォローアップも同様に行われているが、マニュアルの整備及び活用が望まれる。

悪性疾患に関する検査の要精査指示率は、概ね10%未満の適正な範囲となっているが、実施把握率については全体的に低い値となっている。しかし2019年度現在は体制が強化され、全体的に50%以上の把握率に上昇している。まずは把握率60%以上を目標に活動を継続していただきたい。生活習慣病の追跡検査把握率は50%以上となっている。

近隣医療機関とは情報の交換が適切になされているが、今後は受診者の利便性に配慮し、近隣の胃・大腸内視鏡検査や乳腺・婦人科・眼科の精査が可能なクリニックのリストを作成することを求めたい。

健診結果の分析は、年報が作成されており、受診状況の統計解析が定期的に行われている。またドック学会が行う調査への協力や、学術大会での演題発表も積極的に行われている。学会発表に際しては、院内倫理委員会にて審査が適切に行われている。

受診者に向けた有用な情報提供として、イベントやセミナー情報を施設内に設置したデジタルサイネージで情報公開している。

健康経営にむけた取り組みとしては、健診データを事業所毎にまとめた分析結果を作成する仕組みがある。医師間での産業医セミナー開催も実施されており産業保健活動も活発である。

業務改善の体制としては、受診者からのアンケート結果を予防医学センターのリーダー会、医局会、運営会議で報告され、改善活動も継続しており記録も適切である。

前回の指摘事項の内、保健指導スタッフの増員がなされ配置は適切になったが、保健指導実績が少なく、実施率向上に向けた取り組みについては継続した取り組みを期待する。

総括

新病院のレイアウトもドック受診者専用の入口やエレベーター設置があり、バリアフリー化もされており、人間ドック充実に向けた取り組みが評価できる。医師による結果説明は100%近い実施率となり、今後は要精査把握率60%に向けた取り組みを期待したい。総合的見地から人間ドック健診施設機能評価の更新認定に値すると判断する。

審査日 2020年1月9日

認定承認日 2020年1月10日